

鎌倉時代に「美」の真髓を極めた日本刀。それを凌駕して我が国の誇りを鍛錬し続ける吉原義人さん。

光を映して人の心を吸い寄せる日本刀。その刀は一瞬の焼入れにより命を与えられる。そして何ともいえない反りと刃紋。生まれた刀は、殺傷の武器ではない。美そのものなのだ。

文/山川敦司 撮影/葦谷真紀 写真提供/吉原義人



松炭を燃やし鋼を熱する「沸かし」では、鍛錬所の温度は五十度以上になる。

日本刀造りは、火との闘いだ。



玉鋼を千度以上の火床に入れ、千三百度ぐらいになったところで取り出し、弟子たちと金槌で相槌を打ちながら鍛えていく。取り出す頃合いを見極めるのは自分の目と耳だけ。玉鋼が溶けかかる寸前まで温度を上げ、それを鍛錬することで、最高の鋼ができる。

かつて、テレビ番組で居合い術の達人が鉄製の兜を日本刀で叩き割る、というシーンを見たことがある。当然ながら兜とは戦の際、打撃や衝撃などから頭部を守る防具。それゆえ高段者といえども、一撃で兜を割ることは至難の業だという。

だが、武士の消失とともに刀の需要もなくなり、日本刀はしだいに日本人の日常を離れて博物館や美術館でのみ鑑賞可能な美術品へと姿を変えてしまった。そのため刀鍛冶も現在は全国で200名ほど。しかも、刀鍛冶だけで純粹に生計が立てられるのは、ほんのわずかだといわれる。

そんな兜割りで名を馳せた男がいる。「最後の剣豪」といわれた榊原健吉だ。明治20(1887)年、剣客と聞こえの高い名士たちが、明治天皇の御前で剣技を披露することになった。兜割りのために台の上に置かれたのは明珍鍛三が作った南部鉄の兜。剣豪たちが次々に挑むものの、まったく刃がたたない。だが、最後の一人、健吉が名刀「同田貫」を大上段から振り下ろす。すると、兜はめきめきと音をたて、真つ二つに割れていったという。

東京葛飾区にある吉原さん宅を訪ねると、敷地内にある鍛錬所からキーン、キーンという澄んだ金属音が聞こえてきた。「日本刀造りは、文字通り火との戦い。夏場などは室内が50度を優に超えるので、体力と精神力がな」と、まず務まりませぬね」

日本の歴史にはその時々々に必ず「名刀」というものがあつた。刀造りの技術は大陸から伝来したのだが、日本は材料である良質の砂鉄に恵まれ、さらに工人たちのたゆまぬ練磨が、世界に誇る日本刀を生み出してきた。

そう語る吉原さんは現在68歳。だが、そのガツチリしたからだつきはまるで現役アスリートのようにだ。日本刀造りは原料となる「玉

鋼」を千度以上の火床で真つ赤になるまで熱した後、地金に鍛え上げるところから始まる。「そうすることで不純物が火の粉とともに叩き出されるんです。ただ、温度を上げすぎると鋼そのものが溶けてしまうので、寸前まで温度を上げて鍛錬する。すると、いい鋼ができあがるんです」

吉原家は、祖父の代から刀鍛冶を営んできた。「明治生まれの祖父は、日本一といわれた刀鍛冶で、小学生の私が仕事場に入っていくと、いつも鞆を吹かせてくれました。鞆吹きは本来親方の仕事で、その場所に座ると祖父の背中越しにすべての工程が見渡せる。それで自分が造っているような気分になってね、そのうちに自然と体が覚えていったという感じでした」

もちろん鋼を鍛えるだけでは、日本刀にはならない。十数回の鍛錬を終え、いよいよ鋼に刃を入れる作業に移る——それが、「焼入れ」だ。「焼入れとは熱した鋼を水に入れ、急冷することによって硬質化させること。十分な急冷がなされなければゆっくり冷えていくし、一方急ぎすぎれば割れが生じる。だから、水に入れるタイミングは一発勝負。刀鍛冶がもっとも緊張する瞬間です」

高校を卒業後、本格的な修業に入った吉原さんは22歳で文化庁認定の刀匠となり、作刀技術発表会で次々と受賞。そんなある日のこと、刀剣界の大御所を訪ねると、そこで目にしたのが鎌倉時代の名刀「一文字」だった。得も言われ

刀には込められた刀工のこだわりが灰かに浮かぶ。

刀は機能的であればこそ
美しい姿になる。

「昔から日本刀は人を斬るための道具ではなく、侍の精神のお守りで、武士道精神を守るための心のよりどころだった!」という吉原さん。



吉原義人 Yoshihara Yoshindo

1943(昭和18)年、東京生まれ。幼少時より祖父・初代国家氏の仕事を見て育つ。高校を卒業後、本格的に刀修業に入り65年、弱冠22歳にして文化庁認定の刀匠となる。73年、備前伝の最も困難なテーマとされる「映り」を鮮やかに再現、初代高松宮賞を受賞。以降、新作名刀展では10年間入賞。80年には米・ダラス市で40日間日本刀の製作を行ない、ダラス市長から名誉市民の称号が贈られる。82年、39歳で刀匠として最高位の「無鑑査」に。海外からの評価も高く、これまでにニューヨークのメトロポリタン美術館、マサチューセッツのボストン美術館などに収蔵され、イタリアのバルジェッロ国立博物館では、ミケランジェロなどの作品とともに展示されていた。アメリカにはシアトルほか3か所に鍛錬所を構え、渡米した際は、全米から刀剣愛好家や刀鍛冶たちが集まる。2004年、東京都指定無形文化財保持者に認定された。

東京都葛飾区高砂8-17-11 TEL:03-3607-5255

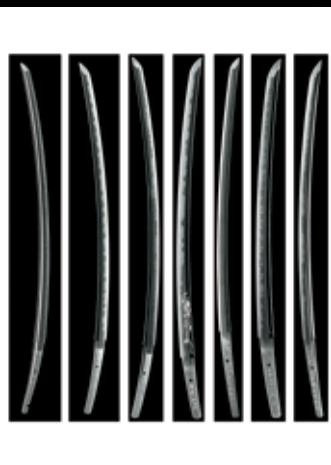
ぬ存在感に圧倒された吉原さんは、その刀を借り受け、傍らに置いた。するとしだいに覚えてきたのが、刀造りの本質だった。

「鎌倉時代の刀鍛冶は、武士が命を託すものとして日本刀を造り、精神的な心の支えとして、一心に鍛え上げたはずです。ただ、現代では美術品ということもあり、反りがきれい、刃紋が素晴らしい、といったことが評価の基準になります。」

ですが、刀を構えたときのバランスや刀身の反り具合、刀の角度など、機能的であればおのずと美しい姿になってくる。つまり、刀の美しさは機能美から生まれるということに改めて感じました。「とはいえ、名刀と称されるものの中にも首を傾げたくなるような作品もあるのだとか。」

「日本における日本刀の価値は、名士の作である」とか、有名な武将が使っていた」という由来、伝来といった来歴が強調されているケースが多い。でも、本来、日本刀は絵画と同じで、刀鍛冶が技術の粋を集め、鋼の美しさを最大限に引き出した美術工芸品なんで

左上/日本刀の刃紋には、直線的な直刃(すぐは)と、波形やさまざまな紋様を描く乱刃(みだれは)に分かれる。乱刃は絢爛、一方、直刃は端正で単純な刃紋だけに地鉄が良しあしの決め手になる。



右上/刀造りの工程は、数百年前とほとんど変わらない。手動の鞆で火を起こし、高温で鋼を焼く。もちろん、作業中は一瞬の気の緩みも許されない、火と刀鍛冶との対決だ。



左下/刀造りに設計図はない。古い時代の名刀を手本にすることはあるが、刀鍛冶は作刀しながら、自分のイメージ通りのものに造り上げていく。中下/砂鉄を精錬して作られた玉鋼。これが日本刀の原料になる。



右下/地金に鍛え上げる槌。刀の理想の炭素含有量は0.7%。炭素などという概念がなかった時代、刀匠たちは鍛錬を繰り返す中、鋼の色や火のはぜる音などで、その頃合を見極めてきた。刀鍛冶の仕事はすべて手作業。そのため、否が応でも作り手の感性や手癖が出るという。

す。だから、武器という粹を取り払って、鋼の芸術品として鑑賞してほしい。私自身はそう思っています」

刀はその時代により、使い方が、形がそれぞれ異なる。

「鎌倉時代から南北朝時代までの刀は実際に使っていたので、反りが深くて形も洗練されています。ところが、江戸中期になると戦もなくなり、木刀から竹刀での剣術修行となつて、刀も竹刀に合わせ反りの浅いものになってしまつた。つまり、時代が刀を変化させていくわけです。私にしても今の時代の刀を表現していきたいですね」と吉原さん。

できあがった刀を見れば、そこに込められた刀工の思いや、こだわりが必ず見えてくる、といわれるが、最後に吉原さんに「いままでの作品で一番気に入っているものは?」と訪ねてみた、すると、「うーん、難しいけどね……ただ、満足したら、その先はないから……」

一生刀鍛冶。平成を生きる天才刀匠は、稀代の芸術家であり、そして間違いなく古武士だった。